

放送ベストセレクション 明日へのことば

心を元気にする アートのカ

ホスピタルアーティスト 高橋雅子

病院内の壁などに絵を描いたりして、入院患者や医療従事者の心を癒やすことに取り組んできた高橋雅子さん。十年前からは、東日本大震災の被災地で人形作りのワークショップを開いたり、町の施設をリノベーションしたりして、アートの力で人々の心を元気にしたいと活動を続けています。人々の心に彩りを与えるアートの力についてお話をうかがいました。

聞き手 関根香里

「ふくしまインドアパーク南相馬」は多くのボランティアによって明るく塗り替えられた。



長野県立こども病院で絵を描く高橋雅子さん。

国立国際医療研究センター病院



好きな布で人形を作る「ハッピードールプロジェクト」は人気の企画。



長期入院中の子どもたちと、闘病を支える家族と一緒に人形作りに取り組む。病室とは違う時間を過ごせたり、思いがけない子ども同士の交流の場になったり、自然と笑顔がこぼれると大好評。



長野県立こども病院



上/花や木などが描かれた集中治療室。右/カラフルな風船を描いた受付。どちらも患者の緊張を和らげる効果がある。



病院内に色彩を！ 場の空気が一気に和む

——病院内に絵を描くというのは、何がきっかけだったのでしょうか？

高橋 もう二十年ほど前になりますが、母が心筋梗塞で倒れて入院生活が続いたとき、病室が無彩色だったことが気になりました。シーツも布団もカーテンも白く、清潔だけれども、リラックスしづらいように感じました。

当時私は、美術館に勤務していて、絵に囲まれた生活をしてきたこともあって、病室にアートの色彩だったり物作

宮城県角田市
はくあいホーム



集まって針仕事をするうちに、生き生きとしてくる。



作品が完成すると自信を取り戻し、誇らしげな表情に。自然と笑みがこぼれ、会話も弾む。



りをする空間があつたら、温かい雰囲気になるのではないかと思います。

病院内にアートを運びたいと思い、企画書を書いて相談を持ちかけましたが、最初は全く相手にされませんでした。病院は医療行為を行うところであつて、心地よい環境づくりということにはまだ意識が向いていませんでした。

そんな状況がしばらく続きましたが、あるとき、とても行動力のある医師と出会いまして、「いいことはすぐに始める、そしてやめないこと」と励まされ、ホスピタルアートの活動が始まりました。

その病院で行ったのは「ハートフルプロジェクト」といって、受付やロビーの周りをハートでいっぱいしようという企画でした。患者さん、お医者さん、病院の職員の方、職員の方のお子さんまで、いろいろな人がやって来てハートを描いていきました。

ふだんの治療のときは、ちよつと怖い先生の髪の毛に、ペンキがぼとんと落ちたりすると、子どもたちはうれしそうに「先生、ペンキがついてるよー」なんて言っていて、気が和むんです。

絵を描いたり何かを作ったり、同じことをするなかでフ

ラットな人間関係が生まれ、会話が弾み、みんなが和める雰囲気になりました。場の空気が変わるだけでなく、皆さんの心の色も変わっていく様子が感じられて、それ以来約十八年、活動を続けています。

**色彩がよみがえると
町も人も活気づく**

——十年前から、東日本大震災の被災地へのアート支援を続けていらつしやいますが、アート支援とはどんな活動ですか？

高橋 震災直後は食品や煮炊きができるしちりんなどの支援物資を運びましたが、半月

ふくしまインドアパーク南相馬



外壁を描く作業も、出来上がった作品も、楽しく明るいものになった。
現在は、施設団体の移行により閉園。

後くらいから、絵を描く道具やスケッチブック、裁縫道具を持っていききました。食品などを支援する方はほかにもいらっしゃるけれど、心に寄り添う支援も必要だろうと思っただけです。

避難所の片隅にマスコット作りの材料を並べて、コーヒを入れてみると、ぼつりぼつり人が集まってきました。子どもがいたり高齢の方がいたり、机もない毛布を敷き詰めただけのスペースでも、マスコットを作り始めると人の輪がだんだんと広がって、そこに団らんが生まれました。多いときで二、三十人、避難



地元の小学生から高校生、その家族など、みんなで力を合わせて完成させると愛着もひとしお。

所によっても違いましたが、針仕事をしながら手を動かし、何もないところから作品ができていくことで充実感が得られ、だんだんと活気を取り戻せたようでした。

一年後くらいからは、仮設住宅になり、アート支援の内容も変わりました。

被災地へ通ううちに人間関係も深まり、仮設住宅が殺風景だから明るくしたい、復興イベントにアートで彩りを添えてほしいなど、具体的に相談されることが増えました。そのなかでも印象的だったのは、高校生たちが地元の町をアートで再生させたいと、

児童館や公園を塗り替えてカラフルにしたいという相談でした。子どもたちが自分のためではなく誰かのために、町を元気にするために時間とエネルギーを使おうとしていることに感動しました。

未来を担う子どもたちが元気に、生き生きと育つためには、好奇心や喜怒哀楽の感情を動かすことが大切です。町がグレーの景色では心が弾みません。

——アートでの支援を十年続けてきて、新たに覚えてきた課題はありますか？

高橋 震災支援のなかで遅れていると感じたのが、障害の

青葉公園

リノベーション前



人が寄りつかなかった薄汚れた遊具が、カラフルに塗り替えられると息を吹き返したように楽しげな感じになる。



好きな色のペンキで遊具を塗り替えるのは、子どもたちにとって楽しい作業だ。明るい色彩にふれると心も弾む。



カラフルに塗り替えられた公園には、活気がよみがえる。

ある人たちの居場所をつくることです。学校や職場のほか、安心して過ごせる場所に、自分の好きなことをしたり何かを表現し制作できる場所が欲しいという要望があって、スタジオを作りました。

現在は、毎週子どもたちが通ってきていますが、子どもたちが学校を卒業したあと、アートの仕事ができる居場所をつくってあげたいと構想を練っています。

福島県立郡山支援学校



色彩遊びに興じる子どもたち。アートの力は、バリアフリーな社会の推進にも貢献する。



©ARTS for HOPE



たかはし・まさこ

1957(昭和32)年生まれ。米国州立ウェスタン・ミシガン大学芸術学部卒業。アメリカ現代美術のギャラリーを経て、美術館のシニアキュレーターに。'99(平成11)年にWonder Art Production、2004年にHospital Art Lab、'11年に東日本大震災の緊急支援チームARTS for HOPEを設立。展覧会オーガナイザーとして世界のアートを紹介するほか、美術館や博物館における子どもの情操教育プログラム、医療現場や地域社会でのアートプロジェクトをプロデュースし、ナビゲーターも務める。

「被災者の心に希望の色彩を」
2020年3月4日放送

によるサポートが必要な各地にいつでも飛んでいけるような体制を整えていきたいと思っています。